

—2024 年度 卒業式より—

魂譲り（譲り手）

今日、私たちは活水女子大学での学びを終え、それぞれに与えられた新たな道を歩もうとしています。これまでの学生生活を振り返ると、様々な出会いや経験で多くのことを学びました。そこには喜びや楽しさだけでなく、思い悩むことや苦しいこともありました。そんなときも家族や友人、先生方、多くの人に支えられ、今日という喜びの日を迎えることができました。

活水学院は今から 146 年前、愛と奉仕を建学の精神として掲げ、「この学院に連なる全ての者が、いつまでも渴くことのない活ける水を豊かに汲み取り、永遠の命を得るように」との祈りを込め、エリザベス・ラッセル先生が創立されました。この手桶には、その思いが満ち溢れており、ここに結ばれてきたリボンの一本一本には、先輩方の祈りが込められ、活水の伝統として今もお受け継がれております。

今回私は、卒業生を代表して、「白」と「夕日色（ゆうひいろ）」のリボンを新たに結び加え、在学生の皆様にお譲り致します。「白」のリボンには、「どこまでも広がる白いキャンパスに、それぞれの夢や願いをのびのびと描いていけるように」との願いを、「夕日色（ゆうひいろ）」のリボンには「どんな時でも夕日のような温かさが皆を包んでくれるように」との願いを込め、お譲り致します。

在学生の皆様、どうかこの 2 本のリボンに込められた思いを心に留め、「活ける水を汲み取るもの」となってください。皆様の歩みの支えとなるよう、旧約聖書 哀歌 3 章 2 2 節から 2 3 節の御言葉、「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。それは朝ごとに新たになる。」をお贈り致します。

最後に、活水学院の上に、神様の豊かな祝福とお恵みがこれからも限りなくありますよう、心よりお祈り申し上げます。

今田 涼加（音楽学部 音楽学科卒業生）

魂譲り（受け手）

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

ただいま、これまで多くの先輩方より受け継がれてまいりました手桶をお譲り頂きました。今年は新たに「どこまでも広がる白いキャンパスに、それぞれの夢や願いをのびのびと描いていけるように」との願いを白色のリボンに、「どんなときも夕日のような温かさが皆を包んでくれるように」との願いを「夕日色（ゆうひいろ）」のリボンに託し、結び加えて頂きました。

私たち在校生は、この 2 本のリボンに込められた思いを心に刻み、「永遠に渴くことのない、活ける水」をくみ続ける活水の学生として歩んでまいりたいと思います。

卒業生の皆様は、この学び舎で神様の限りない愛を受け、先生方や家族に支えられながら、友人と共に様々な体験や学びを通して成長し、そして今日、晴れの日を迎えられました。これからはそれぞれの道を歩んでいかれますが、喜びや感謝の時ばかりではなく、忍耐を試されるときや困難を覚える時もあるかもしれません。しかし、どのような時にも、いつも神様は共にいて先輩方の行く手を照らし、導いてくださいますように。これからも愛と希望をもって、道を歩み続けてください。

最後に、今日から始まる新たな歩みの上に、神様の豊かなお恵みと祝福がありますよう、心からお祈り申し上げます。

松葉瀬 亜紀（看護学部 看護学科 1 年）

—朝の礼拝から 1—

神様の慰め

マタイによる福音書 6 章 25～31 節

2025 年が始まってほぼ半年が経ちました。4 月に始まった新しい生活の緊張やストレスが、そろそろ疲れとして表れる頃かもしれません。最近ニュースで「6 月病」という言葉を耳にしました。6 月病とは、5 月病のような症状が 6 月に出ることをいうそうです。皆様の中にもなんとなくやる気が出ない、体がだるい、集中できないといった不調を感じている方もいらっしゃるかもしれません。このようなとき、心には様々な「思い煩い」が重くのしかかってきます。

今日の聖書の箇所では、イエス様は「思い煩うな」という言葉を私たちにくださいます。イエス様は、私たちが何を食べるか、何を着るか、将来どうなるかといったことで、あれこれ心配しすぎることの無益さを教えてくださいます。そして、私たちを鳥や花よりもはるかに価値ある存在として大切に思ってくださいます。もし神様が、小さな鳥や野の花さえも顧みてくださるのなら、私たち人間を顧みないはずがありません。

私たちは、自分たちの努力や心配によって未来を変えられると錯覚しがちです。しかし、イエス様は「思い煩ったからといって、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか」とおっしゃいます。心配することで、何も解決しないどころか、心身を疲弊させてしまうだけなのだと思います。ですから、明日の心配は明日に任せましょう。今日、自分に与えられた務めに集中し、今日という一日を神様と共に生きる。そうすることで、私たちを苦しめる漠然とした不安から解放され、心の平安を得ることができるのではないのでしょうか。

神様を信頼し、思い煩いを委ねて、今日という一日を大切にしていきましょう。

富永 祐子 (国際文化学科)

—朝の礼拝から 2—

キリスト教学校で生かされる恵み

ヨハネによる福音書 4 章 13～14 節

昨年度の 10 月に続き、この礼拝の時をご一生できる恵みに感謝いたします。わたしたちの清和学園は、来年度末、125 年の歴史をもって閉校することが決まりました。閉校することが知らされ始まった昨年度 4 月、新しい学年が始まった時、校内はいつもと変わらぬ空気に満ちていたように思います。それは、わたしたち学校で共に過ごす者たちが、1 つの思いをもって集まっていたからです。その思いとは、ここまで紡がれてきたものを最後まで大切にしよう、というものです。

清和学園の校名の由来であり、また建学の精神となっているものは、マタイによる福音書 5 章 8 節、9 節です。世界各地で人の命を蔑ろにする戦争が続いている今、この建学の精神の基、わたしたちに何ができるのかを考えると、お互いに知恵を、知識を身につけて世に出ていくこと、キリスト教学校が持つ本来の品性を最後まで保つこと、これがわたしたち、最後を担う者の務めであると一人ひとりが自覚したからこそその空気感、雰囲気でした。

わたしたちは長崎を訪ね、「平和とは本当にどうあるべきなのか。どうすることが平和を創り出すことになるのか。わたしたちは何を本当に学ばなければならないのか。今生かされている命をどのように用いる必要があるのか」と、多くの課題が与えられています。

今朝の聖書の箇所は、活水の校名の由来ともなる箇所です。わたしたちには今、学ぶ時が与えられ、永遠の命に至る水を受けるよう、集められています。過去に学び、今を精一杯生きること、未来が開かれることをわたしたちは知っています。

今日 1 日も、1 つ 1 つの出会いを大切に、しっかりと学びの時となるよう、祈りたいと思います。

三浦 真菜 (清和女子中学高等学校教頭 2004 年度本学音楽学部卒業生)

一朝の礼拝から 1—

Truth

ヨハネによる福音書 8 章 32 節

When I was a student, I read a book called “The Gulag Archipelago” by the Russian writer Alexander Solzhenitsyn. It tells the story of the prison camps in the former Soviet Union where Solzhenitsyn was imprisoned for about 8 years. He was sent there because, while he was fighting against Hitler’s Germany, he wrote a letter to a friend criticising the leader of the Soviet Union – Joseph Stalin.

While in the camps, he thought about why he had been imprisoned and concluded that the answer was not because Hitler invaded the Soviet Union or because Stalin didn’t like what he had written. Rather Solzhenitsyn looked at himself and what he had or hadn’t done. He realised that he hadn’t always told the truth and, by not being truthful, he had contributed to being put into a prison camp.

Jesus says “...ye shall know the truth, and the truth shall make you free.” and for Solzhenitsyn, this is true not only in the sense that by believing in Jesus we will understand what is right and be free of our sins, but it is also true in our ordinary, daily lives. By telling the truth, we make our own lives better and make the lives of those around us better. We all know instinctively that is always better to be honest. However, how many of us always tell the truth? How many small lies and evasions do we tell?

It is very hard to always tell the truth, especially if the truth will hurt or injure someone, and often we must be very careful about how we express ourselves. However, if we do tell the truth and are always honest, other people will come to trust and respect what we say, and we will make their and our own lives much better.

Andrew Gorringer (英語学科)

一朝の礼拝から 2—

神様に喜ばれる言葉、そして生き方

エフェソの信徒への手紙 4 章 31～32 節

私たちが怒ることについて神様はどう思われているのでしょうか。私たちはなぜ怒るのでしょうか。どうしようもない時でしょうか、それとも自分の思い通りにならない時でしょうか。相手の言うことをよく聞かず、理解できないままに怒ってしまうことはないでしょうか。

4 章 2 5 節から 5 章 5 節は、「新しい生き方」という見出しがあります。そこでは、私たちは互いに体の一部であり、悪い言葉を使うと神の聖霊を悲しませ、神様が悲しむことになるかと伝えられています。

何気なく使う言葉ですが、その言葉で傷つくこともあれば、よい気持ちになることもあります。私たちは言葉を使うときに、神様が喜ばれるか、悲しまれるだろうかと意識することはあるのでしょうか。

日常の中で言葉を使わなければ生きていくことは難しいです。神様はヨハネによる福音書の中で「はじめに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。」と伝えられ言葉が全てのもととなったことを示しています。神様は私たちの罪を贖うために、主イエスキリストを遣わされました。神様の示した道に従うためには、隣人を自分の体のように愛し、体を造る言葉を大切に使うことがとても大切です。神様が伝えられたお言葉を素直に受けとり神の子として生きることが大切です。

隣人は、自分の体の一部であると神様は伝えます。自分の体の一部が調子が悪いといって、その一部を捨てることはできません。それと同じように、隣人が不安な気持ちになったり悲しんだりするような言葉を使ってはいけないと神様は私たちに教えています。神様からお示しいただいた道を外れないように、正しい言葉を他者への思いやりをもって使うようにしましょう。

中野 忠彦(教務課)

—朝の礼拝から 1—

The Light of the World

ルカによる福音書 2 章 28～32 節

Do you have a Christmas tree? When I was a child, my family had a real tree which we put indoors a few days before Christmas and decorated with lights, tinsel, various ornaments and wrapped chocolates, and topped with an angel. After I made a home in Japan, I bought a small but realistic-looking plastic Christmas tree and gradually built up a collection of decorations.

The Christian tradition of decorating an evergreen fir tree originated in 16th century Germany, with “Paradise Trees”. These were decorated with apples and used in Mystery Plays on December 24th to teach the story of Adam and Eve. Gradually edible ornaments and candles were added to the tree. Some say that Martin Luther added the candles to replicate the stars. Queen Victoria’s German husband Prince Albert is credited with making Christmas trees popular in the UK, while German immigrants took the custom to the US with them.

Christians see the evergreen branches of the Christmas tree as a symbol of God’s everlasting love, the candles represent Jesus as the light of the world, and the ornaments show the beauty of God’s grace. A star, cross or angel at the top of the tree is a reminder of the birth of Jesus and his ultimate sacrifice.

Luke 2:28~32 tells us how Simeon had been promised by the Holy Spirit that he would see the Messiah before he died. When Mary and Joseph took the baby Jesus to the temple, Simeon held the child and referred to him as a light to reveal God’s will to all the people of the world. When we look at our Christmas trees, may we remember that Jesus was sent to be the light of the world, embodying God’s everlasting love.

政次 カレン（子ども学科）

—朝の礼拝から 2—

讃美歌に導かれて…

コリントの信徒への手紙 I 10 章 13 節

みなさまは “自分を支えてくれている讃美歌” を意識なさったことがありますか？

随分前のことですが、卒業生の M さんが訪ねて来てくれました。大変聡明で、周囲を和ます優しさを発揮して学生時代を過ごし、憧れの仕事に就いた方です。が、その時は、数年間の仕事上のストレスで心身が悲鳴をあげている状態でした。強い人間不信や孤独感が彼女の心を塞いでしまい、身体も動かせない辛い毎日が続いていたそうです。ところが、そんな時なぜか「心を高くあげよ」この讃美歌がふっと浮かび、口ずさむと心が解けて涙が溢れ「そうだ。活水に帰ろう！」と自分の意志でベッドから起き上がったのだそうです。

すべては神様のご計画なのですね…。彼女を待っていたかのように卒論ゼミの先生がお見えになり、深い語らいの時を過ごしました。その後も複数の先生方が彼女の心に寄り添い、和やかな時間が流れました。2 ヶ月ほど過ぎて「先生方に囲まれ幼い子どものようにしている写真の自分を見て、両親と一緒に久しぶりに笑い嬉しくて泣きました。私は独りじゃない。いつでも受け入れてくれる母校があって本当によかった。変わらない人、景観、空気、ホッとします」との手紙が届きました。

つらい状況の中であって、彼女もご家族様も相当ご苦労されたことと胸が痛みますが、知らず知らずのうちに彼女の心に息づいていた讃美歌と、かけがえのない思い出が詰まった母校のあたたかい空気は、彼女を強く支えるために神様が備えてくださったものだと思われてなりません。活水は高い学びの教授の場であると同時に、「神様の愛」という希望の光をゆっくりと確実に心に灯し続けてくれる場であると、活水に繋がる者として誇りに感じます。「心を高くあげよ」この讃美歌は、倒れても立ち上がるしなやかな強さの原動力となって、彼女を支え続けるのだらうと思います。

橋本 祐子（就職課）

一朝の礼拝から 1—

見えない「境界線」を越えていく勇気

ヨシュア記 1 章 9 節

私たちには「コンフォート・ゾーン」と呼ばれる、自分にとって心地よく、安全だと感じられる領域があります。「ここまでは安心だが、この先は危険だ」と、私たちは無意識のうちに、心の中に見えない境界線を引きながら生きています。クリスチャンである私たちも、時として「教会や学校の中は聖く守られているが、一歩外に出れば、そこは神のいない世俗の世界だ」という思い込みに囚われてしまうことがあります。

しかし、聖書が語る信仰は、私たちを安全な囲いの中に閉じ込めておくものではありません。ヨシュア記 1 章 9 節は、荒野という“守られた場所”を後にし、異文化や異なる価値観が渦巻く現実社会へと踏み出そうとする民に向けて語られた言葉です。

「強く、雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。」

これは単なる精神論ではありません。慣れ親しんだ殻を破り、未知の世界へと進もうとする者の背中を押す、神様の確かな約束です。私たちがこれから出ていく社会—ビジネスの最前線、研究の現場、多様な人々が集う場所—そのどこにおいても、神様はすでにおられます。

神様は、私たちが引いた境界線の内側だけに留まる方ではありません。「あなたがどこへ行っても、あなたの神、主は共にいる」この約束は、神様の手の及ばない場所など、この世界のどこにも存在しないことを力強く宣言しています。

まもなく新しい世界へ踏み出す皆さん。外の世界を恐れて、内側に留まる必要はありません。本当の学びとは、どれほど厳しい場所にあっても、また多様な価値観がぶつかり合う場所にあっても、神様と共に歩み続ける「自律した勇気」を身につけることです。

不安や恐れがあるかもしれません。しかし、あなたが向かおうとしているその場所で、神様はすでにあなたを待っておられます。自分とは異なる人々と出会い、対話し、光として歩むために、勇気をもって、その一歩を踏み出しましょう。

狩野 暁洋（英語学科）

一朝の礼拝から 2—

Divine Perspective

箴言 3 章 5～6 節

Humans have finite wisdom. Someone unknown once said: “you don’t know, what you don’t know.” To state it otherwise: *test your thinking, trust in God.*

Humans require divine perspective. Isaiah 55:8 teaches us: “My thoughts” says the Lord, “are not like yours, and my ways are different from yours. As high as the heavens are above the earth, so high are my ways and thoughts above yours.”

As God reminds us in Isaiah 44:7: “Could anyone else have done what I did? Who could have predicted all that would happen from the very beginning to the end of time?”

Divine hindsight, insight, and foresight, are three precious, spiritual attributes of God.

Followers of Jesus Christ have the privilege of prayer. Through prayer, God reveals His supreme wisdom to His children. When we do not know, we should ask the Lord.

As we plan our new academic year, and wrap up the existing one, I want to challenge us with the words of Proverbs: “Remember the Lord in everything you do”. Daniel set a prime example, of how to obediently walk in the divine perspective of God, during turbulent times. Daniel acknowledged his ignorance, sought God’s counsel, and applied it (Daniel 2:19). We see the same wisdom in Proverbs: “He will show you the right way.”

Practically speaking, my one goal for 2026, is to frequently meet with God, and pray for His guidance over my daily affairs. Whether that may be in communion, individually, silently, sung, or spoken. I want to continuously talk to God. Most importantly, I do not want to “lean on my own understanding”. As the Bible warns us, we should never rely on what we think we know. I want to “remember the Lord in everything I do”. In doing so, God promises that He will show us the right path.

カレン・ストライドム（国際文化学科）